

編集後記

今年は創価大学創立40周年の佳節に当たる。僥倖にもこのたび、思想史研究の最前線を拓かれていますお二人の研究者から、本学の理念的源泉である牧口常三郎先生の思想に関し御論考を頂戴することができた。京都大学人文科学研究所教授・山室信一先生の「郷土を世界に拓く―牧口常三郎の空間学的視圏とその現代的意義―」は、『創価教育学体系』発刊80周年記念講演会の記録であり、明治時代から平成現代までの巨視的な学術史のコンテクストにおいて牧口思想の尽きざる魅力を考察されている。また、和光大学講師・松井慎一郎先生の「牧口常三郎と河合栄治郎」は、研究所研究会での報告論文であり、過酷な軍国主義時代を生きた両巨人の間に深い思想的関係が存したことを実証的に跡付けておられる。大変に御多用の中、貴重な原稿をお寄せ下さったお二人の先生に心より感謝を申し上げる次第である。

*

講演の部では、本学創立者池田大作先生の《名誉学術称号御受章300号》を記念して、第1号のモスクワ大学名誉博士号授与式に始まる「英知の宝冠」の歴史について、歴代の国際部長を務められた若江正三先生と北政巳先生に御講演頂いた。東西冷戦という激動の時代の只中で、数十年にわたり世界的規模で切り拓かれた創立者の《対話の軌跡》が詳細に証言されている。また、本誌創刊号からのシリーズ“創価大学の草創期を語る”では、本学1期生の証言資料として、石井講演「創立者と学生の絆―自身の体験を通して―」、花見講演「私の学生時代―『第二の草創期』の視点から―」の2編を収録した。さらに神立講演「創価学園・創価大学と創立者（第2回）」は、創価学園草創期に関する生徒の眼からの証言資料を提供するものである。

論文の部では、前記松井先生の「牧口常三郎と河合栄治郎」の他、3本を収録した。伊藤論文「牧口常三郎の戦時下抵抗（2）―聖戦思想批判―」は、『特高月報』所収の《牧口常三郎訊問調書》に記録された戦争批判の言説に関する研究。富岡論文「池田大作の教育思想―女子教育の観点から―（2）」は、創価女子学園（現・関西創価学園）教職員を対象にインタビューを行い、同校の教育理念を考察したオーラル・ヒストリー研究である。塩原論文「『創価教育学』誕生の時期をめぐって―牧口常三郎と戸田城聖の対話を手がかりに―」は、従来諸説が存した「創価教育学」という言葉の誕生時期について文献証拠を固めつつ詳細に検証した論考である。

研究ノートの部では、アメリカのデポール大学J・グーラー博士の「Daisaku Ikeda, Soka Education and Foreign Language Learning: A Short Essay」が、アメリカにおける創価教育実践の試みと展望について論じている。高橋報告「中国における『池田思想』研究の動向（7）」は、2010年に中国や台湾の諸大学で開催された5つのシンポジウムを中心に研究状況を紹介している。

資料紹介として、今回は3点収録した。「牧口常三郎編輯の『家庭楽』第1号および第6号」は、牧口先生が1906（明治39）年に、主幹を務める大日本高等女学会から発行された雑誌の紹介。「『新教』第6巻第1号掲載の牧口常三郎の論考5編」は、牧

口先生が創価教育学会で初めて発行された月刊誌『新教』のうち、現存する最も初期のものである。これにより、『牧口常三郎全集・第9巻—後期教育学論集Ⅱ—』（第三文明社、1988年）所収の「創価教育学講座（第2講～第6講）」では未発見だった《第1講》が補填されることとなった。「戸田城外著『中等学校入学試験の話と愛児の優等化』（2）」は、戸田先生が1929年12月に出版した処女作の翻刻（一部）である。これらはいずれも、創価教育研究のみならず、日本教育史研究の上でも貴重な歴史資料といえよう。

新刊紹介としては、2010年夏に《創価教育80周年》を記念して出版された本学名誉教授・斎藤正二先生の畢生の名著『牧口常三郎の思想』（第三文明社、評者・牛田伸一氏）と、古川敦編『牧口常三郎の教師論』（論創社、評者・富岡比呂子氏）の2冊を取り上げた。

*

さて、本誌『創価教育』はこれで第4号となるが、前誌『創価教育研究』と併せると、研究所紀要として10冊目の節目を刻むこととなった。とくに今回は350頁を超す大冊となり、執筆者の方々に重ねて深く感謝申し上げたい。今後とも読者の御批正を頂きつつ、更なる充実化に努力して参る所存である。

最後に、本号作成に際してご協力頂いた方々、とりわけ矢島印刷に深く感謝を申し上げます。

2011年3月16日

(T. I.)